

章懷太子李賢と兄弟姉妹および妃嬪三子

小林 岳

はじめに

章懷太子李賢は、唐の第三代皇帝高宗（位六四九〜六八三）と則天武后の間に生まれた李弘（贈孝敬皇帝、生没年六五二〜六七五）・李賢（贈章懷太子、同六五四〜六八四）・李顯（中宗、同六五六〜七一〇）・李旦（睿宗、同六六二〜七二六）の四子のうち第二子となる。ただし異母兄には燕王忠（生母劉氏、同六四三〜六六四）、原王孝（生母鄭氏、同？〜六六四）、沢王上金（生母楊氏、同？〜六九〇）、許王素節（生母蕭淑妃、同六四八〜六九〇）がおり、さらに異母姉の義陽公主（生母蕭淑妃、生没年不明）と高安公主（同前、同前。始封は宣城公主）および同母妹の太平公主（生母則天武后、同六六五？〜七一一）がいるが、これに加えて李賢は二人の妃嬪と三子があつたことが確認できる。本稿は、章懷太子李賢の事績を年齢にしたがつて叙述し、あわせてその兄弟姉妹および二人の妃嬪と三子について概説するものである。

高宗の八子三女関係年表（年齢は数え年とする）

貞觀十七年（六四三）	第一子李忠誕生
	第二子李孝誕生
	第三子李上金誕生
	第一女義陽公主誕生？
	第二女高安公主誕生？
	第四子李素節誕生
貞觀二十二年（六四八）	太宗崩御 六月、皇太子李治即位（高宗）
貞觀二十三年（六四九）	第五子李弘誕生
永徽三年（六五二）	李忠立太子
同	第六子李賢誕生
永徽五年（六五四）	廢皇太子忠為梁王 立代王為皇太子 壬申大赦 改元為顯慶
永徽七年（六五六）	第七子李顥（中宗）誕生
（顯慶元年）	廢梁王為庶人 徙於黔州
顯慶五年（六六〇）	第八子李旦（睿宗）誕生
龍朔二年（六六二）	原王李孝薨
麟德元年（六六四）	庶人忠坐与謀反 賜死 享年二十二
麟德二年（六六五）	第三女太平公主誕生

上元二年 (六七五)	四月	皇太子弘薨于合璧宮 享年二十四
調露二年 (六八〇)	六月	以雍王賢為皇太子
〈永隆元年〉	八月	廢皇太子賢為庶人 幽於別所 立英王哲 (德、中宗) 為皇太子 葬孝敬皇帝于恭陵
開耀元年 (六八一)	十一月	徙庶人賢于巴州
弘道元年 (六八三)	十二月	高宗崩御 享年五十六 中宗即位
文明元年 (六八四)	二月	中宗廢位 睿宗即位
〔嗣聖・光宅〕	二月	庶人李賢死于巴州 享年三十一
載初元年 (六九〇)	七月	沢王李上金自縊死 許王李素節被縊死、享年四十三
神龍元年 (七〇五)	一月	中宗重祚
	十一月	則天武后崩御 享年八十三
景龍四年 (七一〇)	六月	中宗遇毒崩御 享年五十五
景雲元年 (七一〇)	六月	睿宗重祚
先天二年 (七二三)	七月	太平公主賜死 享年四十九
開元四年 (七二六)	六月	睿宗崩御 享年五十五

一 潞王時代の李賢と南陽張氏の納妃（一歳〜八歳）

(i) 李賢の聡敏と則天武后の野心

李賢は永徽五年（六五四）十二月、太宗の陵墓（昭陵）に親謁する高宗に扈從する則天武后がその途上で出産した。翌六年正月、父母にともなわれて長安に帰京すると潞王に封ぜられ、食邑一万户を賜った。時に李賢は二歳とはいえず、生後二か月に満ため襁褓の嬰兒である。

李賢は幼少より英俊とされるが、それは左の『旧唐書』李賢伝（以下李賢伝とする）にもとづくものである。

①時に始めて出閣するに、容止端雅にして、深く高宗の嗟賞する所と為る。②高宗嘗て司空李勣に謂いて曰く、此の兒已に尚書、礼記、論語を讀得し、古の詩賦を誦すること復た十余篇。暫く領覽を経れば、遂に即ち忘れざるなり。③我曾て論語を讀ましむるに、賢易色に至り、遂に再三覆誦す。我問う、何すれぞ此くの如きを為すや、と。乃ち性此の言を愛すと云えり。方に夙に聡敏を成すは、天性より出するを知る、と。④龍朔元年、徙して沛王に封ず。

これは顯慶元年（六五六）、三歳となつた李賢が、①はじめて出閣して長安安定坊に王宅を賜わり、さらに刺史・州牧・都督に補任された謝辞奏上のため参内した折のエピソードで、その举止進退の優雅さを高宗が絶賛したとする。ただし李賢が三歳の童子であることを顧みると、②『尚書』以下の読得や古詩賦の暗誦および③『論語』「賢易色」の「再三覆誦」はともかく、その真義までを会得したとするには無理があるのではないか。なお、これは④龍朔元年（六六一）、八歳の李賢が沛王に改封される以前のことであるから、その年齢近くの話柄と考える方が妥当かもしれない。しかしいずれにせよ、幼い李賢が教えられるままにくり広げたパフォーマンスとすれば、そこに則天武后の色濃

い影が浮上してこよう。

すなわち「賢賢易色」は『論語』学而篇に、

子夏曰く、賢賢易色、父母に事えては能く其の力を竭し、君に事えては能く其の身を致し、朋友と交わり、言いて信あらば、未だ学ばずと曰うと雖も、吾は必ず之を学びたりと謂わんと。

とあり、「孝忠信」の実践を説くものである。とくに「賢賢易色」は難解とされ、古来より解釈が分かれるが、ここでは高宗の御前で幼い李賢が自らの名を重ねる「賢賢」から「父母に事えては能く其の力を竭し」につづく一節を懸命に唱える場面を想像したい。それは必ずや高宗の耳底に残り、則天武后の所生になる第六子の存在を印象づけたに相違ない。もとより李賢の聡敏は天性であるうが、八歳に満たぬ幼児が自己の「夙敏」を父の脳裏に刻むべく、「再三にわたって覆誦」したとは考えがたい。そこには則天武后が介在し、その意を受けた傅育者によって「夙敏」たるべき教育のもと、高宗に拝謁する折の所作から古典の暗唱まで身体に刷り込まれたに相違ないのである。言うまでもなく、その目的は永徽三年（六五二）に十歳で立太子してより存在感を増しつつある高宗の第一子李忠を廃し、おのが所生子を皇太子に据えることにある。あるいは、この話は永徽七年（六五六）の李忠廃太子後のことかもしれないが、同様のことは兄李弘にもなされたであろう。いずれにせよ、李弘李賢兄弟は則天武后の一の矢、二の矢として皇太子李忠らの異母兄を射貫き、大唐の皇位を継承し、それを守成すべく特別な育成が施されたに相違ない。さきの高宗の言葉は、その計画の順境を示すものであろう。

(ii) 南陽張氏とその生涯

李賢の家族について史料上確認できるのは南陽張氏と清河房氏と称する二人の妃嬪と第一子光順、第二子守礼、第

三子守義の三子であるが、光順と守義の生母は不明のため二氏以外に妃嬪が存在する可能性は否定できない。

ここでは潞王時代に納妃した南陽張氏について解説する。

張氏は『文苑英華』所収「章懷太子良娣張氏神道碑」に人物像が記され、その要所を抄出すると左のごとくなる。なお、この神道碑は張氏の死後十数年を経た開元年間前期（七二一〜七二七）に、李賢亡きあと苦勞を重ねた母の頭彰をめざす守礼が従兄弟の玄宗に嘆願し、その勅許のもと玄宗朝の宰相で当代随一と讃えられる文人蘇頌（六七〇〜七二七）が碑序銘を撰し、守礼自身が清書をして建立したものである。

- ① 我が唐の章懷太子良娣は南陽張氏の子なり。邠王守礼の母なり。② 初めて章懷雍に封ぜられ、良娣選ばれて以て入る。③ のち章懷巴に謫さるるに、良娣随いて邁く。④ 逶迤として偕老を失すと雖も、契闊は与に成すに存り。
- ⑤ 始めて十四にして吾が夫を奉じ、笄年に逮んで転た茂なり。⑥ 終るとき六十四、吾子に違る。⑦ 隋の上儀同甘泉府別將張嚴之の曾孫、侍御史、陸州刺史張詳之の孫、同じく朝議郎、行貴州都督府始安県令張明之の女なり。
- ⑧ 粵に景龍二載孟夏の月、疾に遭いて京の延康の第寝に棄養す。

以下この碑文を読み解くと、①章懷太子李賢の良娣張氏は邠王守礼の生母である。その出自は⑥南陽（現在の河南省南陽市一带）を本貫とする隋の上儀同甘泉府別將張嚴之の曾孫、唐の侍御史陸州刺史張詳之の孫、朝議郎行貴州都督府始安県令張明之の娘である。②李賢の雍王初封時（六七二〜六七五）に良娣に選ばれて入興した。ただし張氏は、⑤十四歳で吾が夫を奉じ、笄年（十五歳）に逮んでいよいよ茂とされ、さらに⑧重祚後の中宗景龍二年（七〇八）四月に長安城延康坊の私第で薨去し、⑥享年は六十四とされることからすると、李賢との年齢差が問題となる。すなわち張氏は太宗貞観十九年（六四五）の生まれで李賢より九歳年長となるため、さきの十四歳時には夫李賢は潞王を冠する五歳の幼児となつて解釈に困難をきたす。あるいは入興した張氏は幼い李賢に侍し、その成長を待ちつづけたのであろうか。碑文に誤りなくまたそれに依拠するかがぎりこの年齢差は埋まらぬが、李賢の生母則天武后が父高宗より

も最大で五歳年長であることを想起すれば、そのような事例もあり得ると見なせよう。後述するごとく張氏所生の第二子守礼の生年が咸亨三年（六七二）またはそれより数年さかのぼることを勘案すると、守礼は父李賢が雍王となる十九歳まで、母張氏が二十八歳までに誕生したことになる。この観点からすると、右の②は雍王徙封にともなつて良娣に昇格した張氏が守礼を生んだと解釈することもできよう。

ついで③は高宗の永淳二年（六八三）十一月、長安に幽閉されていた廢太子李賢に巴州謫徙の命が下り、張氏はそれに随従したことが確認できる。李賢は到着して三月ほどの文明元年（六八四）二月に則天武后の使者によつて自殺に追い込まれ、三十一歳の生涯を閉じた。④は長く李賢に仕え、偕に老いる願いは断たれたものの、その固い契りは成就したとして張氏の婦徳を讃えている。それは亡き母を想う守礼の絶唱に相違ない。

配所にあつた張氏は、垂拱元年（六八五）三月に営まれた李賢の葬儀が終わると長安にもどされ、延康坊の私第に居住したと考えられる。十余年のちそこで薨じたことは右のごとくである。張氏の訃報に接した中宗は雍王良娣を追贈し、王嬪の礼にしたがつて乾陵（高宗と則天武后の同穴合葬陵）に陪葬されている雍王李賢墓に異穴合葬した。すなわち張氏は李賢の墓室内には合葬されず、李賢墓区域内に新造された墳墓に埋葬されたのである。

なお、これに加えて張氏には初唐後期の宮廷詩人として名高い沈佺期（六五〇？～七一三？）の「故章懷太子良娣張氏冊文」がある。これは後述する景雲二年（七一）十月に営まれた清河房氏の葬儀の折に睿宗の勅命を奉じて作られたもので、その全文は左のごとくである。

- ① 維れ景雲二年歲次は辛亥十月壬寅朔十日辛亥。② 皇帝若曰く。於戲、於戲。咨爾爾故章懷太子良娣張氏よ。家は峻閭を承け、代に徽猷を襲う。法度に章有りて、言容克つ備わる。③ 始めて良選に應じて元儲に入奉す。柔規は上下に緝い、淑問は中外に揚がる。④ 恩は質帝に絶え、七日に帰ること無し。義は從子に申べ、百齡もて先に謝る。言に窳窳を念い、憫悼は良に深し。⑤ 徽号を追崇せんとす、典故は斯れ在り。⑥ 是を用て某官某乙に命じ

て爾なんじを冊ふし、章懷太子良娣と為さしむ。魂たまは而すなわち靈たま有り。応こに茲いれ寵いみ数かずたるべし。

冊文は、①景雲二年（七一）十月十日と記すが、それは同十九日に執行される清河房氏の葬儀に九日さきだつものである。睿宗はそこで②「於あ戲、於あ戲。咨これ爾なんじ故こ章懷太子良娣張氏よ」と呼びかけて、その生家の名門たること、その言動と容姿の高貴なることを讃え、さらに③李賢に入奉してより家政を修め、美名を宮中に揚げたとする。ついで④太子亡きあとは子の守礼にしたがい、高齡をもつて薨去したが、その葬柩を念おもうと深く憫あはれみ悼いたむ。⑤ここに尊きき徽き号ごうを追崇し、⑥有司に命じて爾なんじを章懷太子良娣となす。魂たまは神聖この上なし。その称号に相応しき儀礼をととのえよ、とする。

前述のごとく、張氏は景龍二年（七〇八）四月に薨去し、中宗によつて雍王良娣に冊贈されて雍王李賢墓に異穴合葬されたが、ここでさらに章懷太子良娣に追冊し、その称号に相応しい儀礼をおこなうのである。これは皇太子妃の礼によつて執行される義母房氏の葬儀を目前に控える守礼が生母張氏にも皇太子良娣の追贈を願ひ、睿宗の裁可を得たことを示すものである。ここで一言すると、中宗朝期に造営された張氏墓に神道碑が造営されたかは不明で、仮に建てられたとしても「雍王良娣」と刻むそれに守礼は満足しなかつたのであろう。ただしその時点で「章懷太子良娣」とする神道碑の再建または新造をなすことは睿宗の兄中宗を批判することにもなるので、憚おそからねばならなかつたのであろう。守礼がその思いを余すところなく込めた神道碑が建立される玄宗朝までなお十数年の歳月を要したのである。李賢の名譽回復をふくむ中宗睿宗朝期の宮廷闘争については別稿で論ずることとする。

二 沛王時代の李賢と沛王府の学問（八歳〜十九歳）

(i) 李賢と王勃

李賢は龍朔元年（六六一）、沛王に改封されて使持節都督、楊、和、滌、潤、常、宣、歙七州諸軍事を加授、揚州都督（刺史）、左武衛（候）大將軍を兼ね、さらに翌龍朔二年（六六二）に揚州大都督、麟徳二年（六六五）には右衛大將軍を加授されて兗州都督を兼職した。

沛王時代に特筆すべきは初唐四傑の一人王勃（六五〇？〜六七六？）を召して書を編纂させるとともに、文史に關する教授を命じたことである。それは『新唐書』王勃伝に、

①王勃字は子安、絳州龍門の人なり。六歳にして文辭を善くす。②九歳にして顔師古の漢書に注するを得て之を讀み、指瑕を作り以て其の失を擣ぐ。③麟徳の初め、劉祥道関内を巡行するに、勃上書して自ら陳ぶ。祥道、朝に對策高第を表す。年未だ冠するに及ばざるも、朝散郎を授けられ、數しば頌を闕下に獻ず。④沛王其の名を聞き、召して府の修撰に署し、平台秘略を論次せしむ。書成り、王之れを愛重す。⑤是の時、諸王鷄を闘わすに、勃戲れに文を為り英王之鷄を傲す。高宗怒りて曰く、是れ且に交構せんとす、と。府より斥出す。

とある。

ここで李賢と王勃の關係を探ると、②王勃は九歳にして顔師古（五八一〜六四五）の『漢書注』を讀して、その失短を指摘する『顔氏漢書注指瑕』十卷を著述した。ただし、その書はつとに散逸して詳細は不明である。③麟徳年間（六六四〜六六六）のはじめに関内を巡行する劉祥道に王勃自身が上書した對策が高第と判定されて朝廷に推挙され、加冠前ながら朝散郎（從七品上の文散官）を授けられてしばしば闕下に頌を獻じた。同所を『旧唐書』王勃伝は、

勃年未だ冠するに及ばざるも、幽素拳に応じて及第す。乾封の初、闕に詣りて宸遊東嶽領を上る。時に東都に乾元殿を造くれば、又た乾元殿領を上る。沛王賢其の名を聞き、召して沛府修撰と為し、甚だ之を愛重す。

とする。王勃の幽素拳科の及第は乾封元年（麟徳三年正月改元、六六六）に比定されるので王勃は時に十七歳、李賢は十三歳である。そのうち高宗の泰山封禪を讃える「宸遊東嶽領」、洛陽の乾元殿完成を言祝ぐ「乾元殿領」の高評を聞いた沛王李賢が王勃を召して修撰に署し、『平台秘略』を論次させて愛重したとする。その書は現存する論贊から推すと君子の規範を論じたものと思われる。王勃が就官した修撰は「史館、修撰四人、国史を修するを掌る」とする中央官に準ずるもので、李賢は沛王府修撰として王勃を召し、『顔氏漢書注指瑕』をふくむ『漢書』の講義を求めたのであろう。そして、これを機縁に「後漢書注」の撰述がなされたと考えるのが無理のない流れであらう。

つづく⑤は王勃の罷免をいうもので、諸王が好む鬪鶏に戯れで「檄英王鶏文」を献したところ、「兄弟の親誼を欺ぎ、争わせる」として高宗の怒りを買ひ、沛王府から追放された。その実は同僚に嫉悪されたためとされるが、一年あまりの在府であった。その年次は總章元年（六六八）に比定され、時に王勃十九歳、李賢十五歳、李顕（英王）十三歳である。

(ii) 李賢と李善、公孫羅、道宣

潞王および沛王時代の王府には、当代屈指の学者である李善（六二〇？～六九〇）と公孫羅（生没年不詳）が出仕している。『文選注』六十巻と『漢書弁惑』三十巻などを撰述した李善は潞王府記室參軍ならびに沛王府侍読として、『文選音義』十巻を撰述した公孫羅は沛王府參軍に就官したが、この二人はともに揚州江都を本貫とし、同地で文學の泰斗曹憲（五四一？～六四五）から『文選』の教授を受けた同門の学者として南朝の注釈学の伝統を継ぎ、それ

を李賢に伝えたと推測される。とくに李善『文選注』は、その注記が李賢『後漢書注』に転写されていることから両者の濃密な関係が確認できる。ただし李善および公孫羅が『後漢書注』の編纂グループに加入した形跡は認められない。これについては稿を改めて記すことにしたい。

道宣^{どうせん}(五九六〜六六七)は、南山律宗の開祖で、南山律師と称される。貞観十九年(六四五)に帰朝した玄奘(六〇二〜六六四)がインドから将来した仏典の漢訳事業に参加し、さらに顕慶元年(六五六)、皇太子李弘(五歳)の病氣平癒を祈願して建立された西明寺を統括する上座に招かれるなど初唐期の仏教界を代表する人物として知られている。なお、日本の留学僧の懇請に応じて渡日し、戒律を伝えた鑑真(六八八〜七六三)はその孫弟子にあたる。

道宣と李賢の交誼は、龍朔二年(六六二)四月に高宗が下した「有司をして沙門等の致拜君親を議せしむるの勅」に対する反対運動を契機とする。すなわち出家の身である僧尼は儒教の世間法に束縛されず、礼孝の世界の外にあるものとして天子や父母に対する礼敬を不要とする「不拜君親」の問題点を有司に議論させよとする詔勅に異議を唱える道宣が李賢に「論沙門不応拜俗啓」^{たねまつ}を上り、仏法の擁護者たることを願ったのである。それは天子の寵愛を得て高宗朝の中樞にいる沛王の威勢に期待するものであろうが、時に李賢は九歳であるから、その背後には崇仏者として名高い則天武后とその母栄国夫人楊氏(李賢の外祖母)が控え、その内諾のもとでなされた要望に相違ない。

三 雍王時代の李賢と清河房氏の納妃（十九歳〜二十二歳）

(i) 清河房氏とその生涯

李賢は咸亨三年（六七二）に雍王に改封されるとともに涼州大都督を加授された。この時代のハイライトは正妃となる清河房氏の納妃である。章懷太子妃清河房氏は、一九七二年に出土した「大唐故章懷太子并妃清河房氏墓誌銘」（以下「章懷墓誌」とする）によってはじめて人物像が明らかになった女性である。以下、その要所を抄出して人物像を考察したい。

①妃は清河の房氏、皇朝の左領軍大將軍、衛尉卿、贈兵部尚書仁裕の孫、銀青光祿大夫、榮州刺史、贈左金吾衛大將軍先忠の女なり。②妃は柔明の姿を稟え、和淑の性を包む。十年出でずして、四徳允に修まりたり。③以て上元年中、制命して雍王の妃と為る。三星戸に在り、芳春仲月の辰、百輛途に遵い、雙鳳和鳴の兆あり。④媿媿として左に辟き、舅姑に敬行す。肅肅として霄征し、閨闈に惠流す。⑤而れども天未だ悔禍せざるや、朝に哭し哀しみを纏う。⑥棘心を訓めて咫尺し、蘋藻を採りて事に恭う。⑦以て景雲二年龍集荒落六月十六日、疾に遵いて京の興化里の私第に薨す。春秋五十有四なり。⑧即ち其の年の十月壬寅朔十九日庚申、太子の旧塋に窆る。礼なり。⑨嗣子の光祿卿、鄒王守礼、霜露を履みて幸樹に攀じり、厚地に擗ちて高天に訴う。遺烈を貞琬に紀し、柏質を幽庭に称う。嗚呼哀しいかな。

これによると、①章懷太子妃の房氏は、清河（現在の河北省清河県あたり）を本貫とする左領軍大將軍、衛尉卿、贈兵部尚書房仁裕の孫、銀青光祿大夫、宋州刺史、贈左金吾衛大將軍房先忠の娘である。その生年は、⑥に睿宗の景雲二年（七一）六月に五十四歳で薨じたことから、顯慶三年（六五八）となり、李賢より四歳年少となる。②房氏は

穏やかな性格で、十年にわたって生家の門外に出ず、婦人の四徳である徳（貞順）・言（辞令）・容（婉婉）・功（糸窠）を修得した。③上元中に制命が下つて雍王の妃となつた。それは三星（唐鋤星を構成するオリオン座の三つ星）が夜明け前の東方地平線上に家の戸口ほどの高さに懸かる上元元年（六七四）五月末から六月半ば（陽暦のほぼ六月から七月）にはじまつた婚礼の諸儀式がようやく整い、百花が咲き薫る翌二年二月（陽暦のほぼ三月）のことで、房氏は百輛からなる奉迎の車駕に座乗して雍王李賢のもとに入輿した。時に李賢は二十二歳、房氏は十八歳である。なおこの時点で高宗と則天武后は洛陽に在城していたことから房氏は洛陽城修文坊の雍王府邸に入ったと考えられる。宮中に参上した房氏は、④軽やかに歩み、殿中では身を左に避けて讓る左辟の礼をして高宗と武后に敬行し、その閨房には慶雲が漂つたとする。こうして房氏は雍王妃となり、四か月後の六月、李賢の冊立にもなつて皇太子妃に昇るのである。

こののち五年にわたる皇太子妃の生活は平穩に過ぎたと思われるが、⑤「而れども天は未だ悔禍せざるや、朝に哭し哀しみを纏う」とあるごとく、それは調露二年（六八〇）八月の李賢廃詛によつて暗転し、李賢ともども長安に幽閉、永淳二年（六八三）十一月には張氏や三子とともに巴州に隨從したのである。そして文明二年（六八四）二月の李賢自殺ののち垂拱元年（六八五）三月に葬儀が終わると、房氏は長安にもどされて興化坊の私第に居住したが、それ以後、なお二十年にわたる隱忍自重が強いられたことは、⑥「棘心を訓めて咫尺、蘋藻を採りて恭事す」として遺児の育成と教育とに心苦し、亡夫や亡児の御霊を一心に祀るさまが誌文に託されているのである。

そののち房氏は武周の長安年間（七〇二〜七〇五）に李賢の三子のうちただ一人健在であつた第二子の嗣雍王守礼の太妃に冊立され、また重祚した中宗の神龍二年（七〇六）七月には李賢の乾陵陪葬がかない、加えて睿宗の景雲二年（七一）四月十九日に章懷太子追諡がなされるなど慶事に恵まれた。しかし、それからほどない⑦六月十六日、房氏は長安城興化里の邠王守礼の王府邸で薨去した。享年は五十四。房氏の喪柩は同年十月十九日に皇太子妃の礼を

もつて李賢がねむる章懐太子墓の墓室内に同穴合葬された。最後の⑨は、その葬列に扈從した嗣子の光祿卿邵王守礼は亡父の墳墓の菩提樹にすがり、その厚い墳丘に慟哭して胸を打ち叩き、澄みわたる高天に義母房氏の婦徳と魂の誠とを告げ、褒め賛えたことを伝えている。

この葬儀に際して睿宗は沈佺期に左の「章懐太子靖妃房氏祭文」を撰述させ、哀悼の意を表した。

①維れ景雲二年歳次は辛亥十月壬寅金朔十九日庚申木。②皇帝、具位の某を遣わして少牢の奠を以て、故章懐太子靖妃の靈に敬祭す。③神寢既に就きて、備物肅しみて陳ぬ。絳旒は旋らずして、玄扉は遽やかに掩す。④緇かに永往を懐い、益ます悲敬を増す。式て嘉薦を陳べらく、魂よ、其れ尚餐せよ、と。

ここで①房氏の葬儀日は景雲二年の「十月壬寅金朔十九日庚申木」とするが、その年次・月日・干支ともに前掲「章懐墓誌」の誌文に一致する。ついで②睿宗は然るべき位階の官員を派遣して少牢（羊と豚）を供え、章懐太子靖妃と諡された房氏の靈位を敬祭する。以下③靖妃の靈を祀る神寢に祭品を並べ、その名位を記した絳い旒は旋ることなく、房氏を埋葬した墓室の扉は遽やかに掩じられた。④その往きて帰らぬことを懐うと、悲しみ歔び泣きはいやまじ。ここに嘉き供物を置き並べれば、魂よ請い願わくは受けよ、と結ぶのである。この祭文によつて薨去後の房氏は「靖」と諡され、靖妃と称されたことが知られる。

(ii) 李賢の三子

李賢の子女は、李賢伝に「三子有り、光順、守礼、守義なり」とあるが、管見のかぎりでは史書上に女子は確認できない。

第一子光順は、則天武后が即位した天授元年（六九〇）に安樂郡王に封ぜられ、さらに義豊王に徙封したのち鞭刑

を受けて誅殺された。その生年と生母は不明であるが、弟守礼が咸亨三年（六七二）以前の出生であることを勘案すると李賢の沛王在位時の出生となり、良娣張氏を生母とする可能性が高い。その誅殺時の年齢は二十歳ほどであろう。

第三子守義は、睿宗の文明年間（六八四）に犍為郡王、垂拱四年（六八八）に永安郡王、さらに桂陽王に徙封されたのち病卒したと記されるが、『資治通鑑』天授元年八月の条に「故太子賢の二子を鞭殺す」とあることから、それは鞭刑に起因する傷病死であるかもしれない。その生年と生母は不明であるが、雍王期以後の出生が妥当であるから生母を房氏に比定する可能性も否定できない。その病卒時の年齢は十五歳ほどと推測される。

なお、守義が納妃したことは沈佺期「故桂陽郡王妃楊氏冊文」によつて知られる。その冊文は前述した清河房氏の葬儀に際して下されたもので、冒頭の「景雲二年歲次辛亥十月壬寅朔二十五日景寅火」とする一文は、景雲二年十月二十五日に桂陽郡王妃楊氏として追冊されたことを示す。すなわちそれは十月十日の南陽張氏の追冊儀礼と同様に同年十月十九日に執行された皇太子妃清河房氏の葬儀に付随するものとして追冊されたのであろう。最後に玄宗の先天年間（七一二）に光順は莒王、守義は畢王に追封されるが、それは則天武后のもとで非業の死を遂げた従兄弟に向けた天恩にほかなるまい。

第二子守礼は、李賢伝に付せられた本伝の要諦を示して解説を進めたい。

①守礼本の名は光仁、垂拱の初め名を守礼に改む。太子洗馬を授けられ、嗣雍王に封ぜらる。②時に中宗房陵に遷され、睿宗帝位に居ると雖も、人の朝謁するもの絶ゆ。諸武革命の計に賛成し、深く宗枝を嫉めばなり。③守礼父の得罪を以て、睿宗の諸子と宮中に同処し、凡そ十余年庭院に出でず。④聖曆元年に至りて、睿宗皇嗣もて封ぜられて相王と為り、外邸に出るを許されてより、睿宗の諸子五人も皆な郡王に封ぜられ、守礼と与に始めて外に居す。⑤神龍元年、中宗篡位し、守礼に光祿卿同正員を授く。⑥神龍中、遺詔して邠王に進封し、実封五百戸を賜う。⑦景雲二年、光祿卿を帯び、幽州刺史を兼ねて、左金吾衛大將軍に転じ、单于大都護を遙領す。⑧先

天二年、司空に遷る。⑨開元の初め號、隴、襄、晉、滑六州刺史を歴するも、奏事及び大事に非ざれば、並びに上佐に州を治めしむ。⑩源乾曜、袁嘉祚、潘好礼ら皆な邠府長史と為りて州佐を兼ね。守礼は唯だ弋獵、伎楽、飲諠する而已。

これによると、①守礼はもとの名を光仁としたが、故李賢に雍王が追贈された睿宗の垂拱年間（六八五〜八八）はじめに守礼と改名し、太子洗馬を授けられて嗣雍王に封ぜられた。その改名は則天武后の諱（照・墨）を憚るものである。すでに②嗣聖元年（六八四）二月に中宗が廃されて房陵に遷されてより、睿宗が帝位にあるものの朝謁する者は絶えていた。それは武氏派の革命計画が進み、宗枝は深く嫉まれたからである。この情況下で守礼は、③父の罪によつて睿宗の諸子とともに洛陽城内の宮殿に幽閉され、十余年にわたつて庭に出ることすらなかつた。ここで注目すべきは「睿宗の諸子と同処」として守礼は睿宗の子李隆基（玄宗）・李隆範らとともに武氏派の監視のもとで誅殺に怯える日々を過ごしたことである。その緊迫した十数年の日常は武氏派に抗する血盟を結ばせるに余りあるものであつたろう。その同志的結合は従兄弟の血縁をはるかに越えるものに相違なく、前述した「張氏神道碑」の建立にもつながるのである。さて、この宮中幽閉は、④聖曆元年（六九八）に睿宗が皇嗣として相王に封ぜられて外邸に移り、その諸子五人も郡王となつて守礼ともども宮廷外に居住が許されてようやく解除された。そのうち守礼は、⑤重祚した中宗の神龍元年（七〇五）、光祿卿同正員を授けられ、翌年七月には巴州に下向して父李賢の喪柩を長安に奉還して乾陵陪葬を執行し、さらに景龍二年（七〇八）には生母張氏の葬儀をなしたことに注意したい。つづいて本伝は⑥神龍中に遺詔もて邠王に進封、実封五百戸を賜うとするが、『旧唐書』中宗本紀景龍四年の条に、

六月壬午、帝毒に遇いて神龍殿に崩す。（中略）、皇太后臨朝して天下に大赦し、改元して唐隆と為す。（中略）、安国相王旦を以て太子太師と為し、雍王守礼を進封して邠王と為す。

とあつて本伝の「神龍中」は「景龍中」の誤りであるが、ここでは中宗を毒殺した直後の皇太后（韋后）による不時

の封冊ではあるが、守礼は叔父安国相王旦（睿宗）に次ぐ進封を受けており、宮中における守礼の存在感が示されていることに注目したい。当然ながら守礼は李隆基による韋氏派の誅殺と睿宗即位に尽力したであろうが、それを示す史料は見られぬようである。ただし、その行賞と見られるものが⑦で、睿宗の景雲二年（七一）に光祿卿に加えて幽州刺史、左金吾衛大將軍、単于大都護などの大官を帯びたことが確認できる。なお同年四月には章懐太子の追諡がなされ、ついで十月には清河房氏の葬儀に臨んで義母の婦徳を賛えたとは前述のごとくである。

ついで守礼は、⑧玄宗の先天二年（七一二）に司空に遷り、⑨開元年間（七二三～四一）のはじめに虢、隴など六州の刺史を歴任したが、奏事と大事とをのぞく州治はことごとく上佐にまかせたとする。すなわち⑩宰相格の源乾曜らを邠王府長史として州佐を兼ねさせ、みずからは弋獵、伎樂、飲讌に耽る享樂的な生活を送ったのである。それは父の廃位より四半世紀を超えて受けつづけた苦難の日々に起因するものか、あるいは自身が置かれた微妙な政治的境界を生き抜こうとする保身の業であろうか。

本伝はさらに左につづく。

⑪九年已後、諸王並びに京師に徵還さる。守礼外枝を以て王と為るも、才識は猥下、尤も岐、薛に速ぼず。⑫寵嬖多くして、風教を修めず。男女六十余人、男は中才無く、女は貞称に負く。守礼之に居るも自若、高歌擊鼓す。⑬常に数千貫の錢債を帯び、或に之を諫むる者有りて曰く、王の年は漸高く、家累は甚だ衆し、須く愛惜有るべし、と。守礼曰く豈に天子の兄没するに人の葬すること有らんや、と。⑭諸王内讒に因りて之を言い、以て歡笑を為す。⑮積陰日を累ぬと雖も、守礼諸王に白して曰く晴れんと欲す、と。果して晴るる。愆陽旬に渉るも、守礼曰く即ちに雨ふらん、と。果して澍を連ぬ。⑯岐王等之を奏して云う、邠哥に術有り、と。守礼曰く臣に術無し。則天の時、章懐の遷謫を以て、臣、宮中に幽閉さるること十余年、歳ごとに勅杖を被りて数しは頓み、癡痕を見すこと甚だ厚し。雨らんと欲すれば臣が脊上即ち沈悶し、晴れんと欲すれば即ち軽健たり。臣此を以て

之を知る。術有るに非ざるなり、と。⑰涕泗襟を霑せば、玄宗もまた惘然たり。⑱二十九年薨ず、年七十余。太尉を贈くらる。

解説すると、⑪守礼は開元九年（七二二）、諸王の長安徵還にともなつて玄宗に近侍したが、その才知と見識は玄宗の弟岐王（隆範）や薛王（隆業）に及ぶべくもなかつた。これは正統な皇子教育を受けなかつた証左であろう。その家庭は、⑫寵嬪らの風教が乱れ、六十余人の子女を儲けたが、男子には中才すらなく、女子は貞淑に負くありさまであつた。ただし守礼は自若として高歌撃鼓するのみ。さらに放蕩のゆえか⑬数千貫の錢債を帯びるに至つて諫言がくり返されたが、天子の兄の葬儀は他人の世話にはなるまいよと嘯き、意に介することもなかつた。このように家を斉えず、子女の教育を放棄する利那的、享乐的に生きる心の奥底には、武氏政権下の受難の後遺症、父李賢が登極すれば天下を統べる者は自分との思い、ただし絶対にそれを口外できぬ屈折した心理、さらには名利を捨てて我身の安全をはかる計略などが絡み合い、澗のごとく沈殿していたのではなからうか。

この守礼に李氏一門は同情を寄せるが、それは武氏政権のもとで一度ならず死を覚悟した相身互いの思いであらう。⑭内々の宴に集う諸王はさきの守礼の軽口に欲笑したとするが、そこには長老格の守礼に向けた暖かいまなざしが窺えるのである。⑮は守礼が晴雨を断じて誤らぬことを述べ、⑯それを岐王範が奏上し、玄宗に奉答したもの。そこでは則天武后に幽閉された十数年間、勅杖によつて打ち叩かれ、背中に刻み付けられた瘢痕の疼きによつて晴雨の判断をくだすことが語られている。則天武后の全盛時における唐室の生死は紙一重で脅迫、幽閉、謫徙などを被らぬ者はおらず、誅殺された男子は四十余人を数えるが、そこには父李賢はもとより光順、守義らも含まれるのである。この観点から玄宗は幽閉時に血盟を結んでともに死線を越えて来たこの十四歳あまり年長の従兄弟にかぎりない親愛を覚えたのではなからうか。守礼の生没年は、⑰開元二十九年（七四二）に七十余で薨じたとあり、また『新唐書』は「年七十」につくることから高宗の咸亨三年（六七二）の出生、あるいは少しさかのぼるものとならう。

四 李賢の兄弟姉妹とその生涯

(i) 李忠の皇太子冊立と廃位

『旧唐書』李忠伝によると、李忠は太宗の貞観十七年（六四三）に皇太子李治（高宗）と劉氏の第一子として生まれた。その月日は不明であるが、「高宗初めて東宮に入り、忠を生む」とあることから同年四月の立太子以後となる。その誕生が祝福されたことは、東宮の祝宴に幸じた太宗が「朕に初めて此の孫有り、故に相い就きて樂しみを為さんと語り、さらに「太宗、酒酣たけなみにして起ちて舞い、以て羣臣に属まめば、是に在位するもの遍あまねく舞い、日を尽くして罷やむ。賜物差有り」とあるごとくで、初孫の喜びに舞う太宗とそれに和する群臣の歡喜を確認しておきたい。

ついで李忠は、貞観二十年（六四六）に四歳で陳王に、高宗即位後の永徽元年（六五〇）正月に雍州牧に補任され、さらに同三年（六五二）七月には皇太子に冊立された。時に十歳であるが、その経緯を同伝は左のごとく記す。

永徽元年、①時に王皇后に子無し。其の舅中書令柳奭りゅうせき后ごに説とき、謀はかりて忠を立てて皇太子に為さんとす。忠の母賤せんにして、其の己に親しむを冀こいねがうを以てし、后之を然りとす。②奭、尚書右僕射褚遂良、侍中韓瑗と与に太尉長孫無忌、左僕射于志寧等に諷し、固く忠を立てて儲后ちよごと為すことを請い、高宗之を許す。③三年、忠を立てて皇太子と為す。天下に大赦し、五品已上の子の父後と為る者に勲一級を賜う。

解説すると、①高宗の王皇后は子がなかったため、舅（ここでは外祖父）の柳奭（？～六五九）は微賤の出である劉氏が生んだ李忠を王皇后の後見のもとで皇太子とすることを謀り、皇后の内諾を得た。ついで柳奭は②太宗朝以来の大官である褚遂良（五九六～六五八）および韓瑗（六〇六～六五九）とともに長孫無忌（？～六五九）、于志寧（五八八～六六五）に諮はかり、その総意として李忠の立太子を奏請して勅詔を得たとする。③は永徽三年に挙行した李忠の立太

子にともなう大赦と賜勲で、その規模は後述する李弘のそれに遜色ないものであった。

ここで、李忠冊立の要因となった王皇后と蕭淑妃の確執について一言すると、太原王氏の流れをくむ名門出身の王皇后は、太宗の承認のもと晉王李治に入内し、即位のち皇后に冊立されたが、「無子」ゆえに地位が安定しなかった。これに対する蕭淑妃は姓から推して南朝梁の皇胤と考えられるが、すでに高宗の第四子李素節に加えて第一女義陽公主および第二女高安公主をあげるなど高宗の寵愛をほしいままにし、なかんづく素節は蕭淑妃をはじめとする傳育者の良導のためか、李忠の立太子前後に「能く日に古詩賦五百余言を誦す。学士徐齊聃たんに受業し、精勤して倦まず。高宗甚だ之を愛す」（『旧唐書』李素節伝）とする俊英の兆を示して王皇后の警戒心を増幅させることとなった。すなわち第一子李忠を抑えて五歳年下の第四子素節が皇太子に冊立される可能性は十分にあり、それは間違ひなく王皇后の廃位と蕭淑妃の立后に連動するのである。この動きを止め、王皇后を守るための計略が李忠冊立であることは多言をまたぬが、永徽三年の立太子後も蕭淑妃に対する高宗の寵愛は衰えず、また素節の英才は隠れなきものとなって王皇后の地位を脅かしつづけた。そこで王皇后が取ったつぎなる策は、高宗に故太宗の才人武氏の「復召入宮」を勧言することであった。それは『旧唐書』廢后王氏伝に「武皇后は、貞觀の末、太宗の殯御ひんぎよに随したがいて感業寺に居り。后及び左右数しばしばしば之が為めに言う。高宗是に由りて復た召して宮に入れ、立てて昭儀と為す」とあるごとくで、武昭儀によって蕭淑妃の寵愛を殺ぐことを目指したのである。ただし結論からすると、そのような策謀を弄した王皇后は武昭儀所生の女兒を扼殺したとの罪を着せられ、永徽六年（六五五）に蕭淑妃ともども廢されて庶人に落とされ、宮中に幽閉されて悲惨な最後をとげることとなる。

以上の内情からすると、皇太子の後見となった王皇后の廢位が李忠のそれに直結することは自明であろう。『旧唐書』高宗本紀は王皇后と李忠の廢位について、

（永徽六年）冬十月己酉、皇后王氏を廢して庶人と為し、昭儀武氏を立てて皇后と為す。

(永徽) 七年春正月辛未、皇太子忠を廃して梁王と為し、代王弘を立てて皇太子と為す。壬申、大赦して改元し、
顕慶と為す。

と記す。ここでは永徽七年(六五六) 正月辛未の同日中に李忠(十四歳)の廃太子と李弘(五歳)の立太子がおこなわれ、翌日に大赦改元して顕慶元年としたことに注目したい。それは則天武后の周到な計画と断固たる実行の結果に相違ないのである。

廃位後の李忠については『旧唐書』李忠伝に左のごとく記される。

① 顕慶元年、忠を廃して梁王と為し、梁州都督を授く。其年、房州刺史に転ず。② 忠年漸く長大、常に恐れて自から安んぜず。私かに婦人の服を衣て、以て刺客に備える或り。又た数しば妖夢有り、常に自から占卜し、事発わる。五年、廃して庶人と為し、居を黔州に徙して、承乾の故宅に囚る。③ 麟徳元年、又た忠、西台侍郎上官儀、宦者王伏勝と与に謀反するを誣せられ、死を流所に賜わる。年二十二、子無し。④ 明年、皇太子弘表して葬を収むるを請い、之を許す。

すなわち① 顕慶元年(六五六)、梁王に降された李忠は梁州都督として出鎮し、ついで房州刺史に左遷された。② 成人した李忠は、刺客を恐れて婦人の服を常用し、また妖夢を見ては自身で占卜することが発覚して、顕慶五年(六六〇)、庶人に下されて黔州に流され、高宗の長兄であった廢太子李承乾の配所に幽囚された。③ 麟徳元年(六六四)、李忠は則天武后の廢位を狙う上官儀と王伏勝の謀反の関与したと誣告され、死を賜った。享年二十二、子はなかった。④ 翌年、皇太子李弘が葬儀の執行を上表して裁可されたが、時に李弘は十二歳であるから、それは皇后位をめぐる権力闘争に巻き込まれ、短命におわたった長兄の魂を鎮めるよう高宗の指示を得たものかもしれない。

ついで高宗朝における皇太子李忠の待遇は李弘のそれと変わらぬことを確認すると、それは『旧唐書』高宗本紀に、
① (永徽三年) 乙丑、左僕射于志寧太子少師を兼ね、右僕射張行成太子少傅を兼ね、侍中高季輔太子少保を兼ね、

侍中宇文節太子詹事を兼ね。

② (同右) 九月丁巳、太子中允を改めて内允と為し、中書舍人を内史舍人に為し、諸率府の中郎將を改めて旅賁郎將と為し、以て太子の名を避く。

③ (永徽六年) 二月乙巳、皇太子忠元服を加う。内外文武職事の五品已上の父の後為る者に、勲一級を賜い、大酺すること三日。

とあるごとくで、①は皇太子李忠を補弼する東宮職に宰相級の于志寧、張行成、高季輔、宇文節が任命された。この四人は貞觀の治の功臣として太宗に信任され、高宗朝でも重責を担う大官である。とくに于志寧はつづく李弘の太子太傅にも就いている。②は李忠の諱に通ずる「中」を避けて「太子中允」を「内允」に、「中書舍人」を「内史舍人」に、太子の属官たる諸率府の「中郎將」を「旅賁郎將」に改めるもの。③は元服時の大赦、賜勲、大酺で、その規模は李弘のそれに劣るものではない。

以上見てくると、李忠の立太子は王皇后の保身によるとはいえず、高宗朝で重く遇されたことは間違いない。早い厖位を予想させるものは見られぬのである。換言すると、大官に囲まれる磐石のごとき体制も則天武后のしたたかな戦略に抗し得ず、脆くも崩れ去ったということである。これ以後則天武后は己が権勢のためにさまざま「賜死」をくり返していくのである。最後に、李忠は死後四十年余を経た神龍初に名誉回復がかない、燕王追封と太尉、揚州大都督が贈られたが、その葬地は不明である。

(ii) 李孝・李上金・李素節と義陽・宣城・太平三公主

第二子李孝、生母は鄭氏。『旧唐書』李孝伝に「麟徳元年薨す。益州大都督を贈られ、諡して悼と曰う。神龍の初、原王、司徒、益州大都督を追贈さる」とある。李孝は異母兄李忠と同年に薨するが、そこに則天武后が関与したことは間違ひなからう。ただし、それを示す史料は見出しがたく、また葬地も不明である。

第三子李上金、生母は楊氏。『旧唐書』李上金伝に「乾封元年（六六六）、寿州刺史に累転し、罪有りて官を免ぜらる。封邑を割き、仍ち澧州に安置す。上金既に則天の悪む所と為り、所司旨を希い、罪失を求索して以て之を奏す。故に此の黜有り」とあるように、若年より則天武后に憎悪されて所司の監視を受け、嗣聖元年（六八四）高宗の大葬に際して異母弟李素節、異母妹義陽公主、同宣城公主と「赴哀」することを許された以外は、死ぬまで中央から遠ざけられて寿州・沔州・蘇州・陳州・随州など五州の刺史として出鎮を強いられた。その最後は武周革命を二か月後に控える載初元年（六九〇）七月に武承嗣の意を受けた酷吏周興が素節と二人の謀反を誣告して洛陽の御史台に召喚したところ、素節が龍門駅で絞殺されたとの報が届き、「恐懼して自から縊死」した。享年は不明であるが、素節のそれが四十三なので、それを少し上回ろう。なお上金には七子あったが、全員が顕州に配流されて六人が死に、ただ一人健在であった義珣が神龍年間に官爵の追還と嗣沢王の追封を受けた。最後に、乾陵に付随する十七座の陪葬墓に上金墓があるので、名譽回復後に帰葬されたことが確認できる。

第四子李素節、生母は蕭淑妃。幼少時から俊敏で高宗に愛されたために則天武后から敵視され、排除対象とされた。『旧唐書』李素節伝に永徽六年（六五五）、皇后となった則天武后が蕭淑妃を殺害すると、中央から遠ざけられて申州刺史に出鎮させられた。素節は時に八歳であった。ついで乾封年間（六六六～六六七）のはじめに旧疾を理由に入朝が拒絶されると、素節は『忠孝論』を上呈して高宗に拝謁を嘆願したが、それを一見した則天武后によって賊賄を誣

告されて袁州に謫徙され、ついで儀鳳二年（六七七）には岳州に終身禁錮とされた。そのうち永隆元年（六八〇）に許されて岳州および舒州の刺史に除せられたが、上京して高宗に見える朝覲ちようきんはついに叶わなかった。このように素節は「安置」や「禁錮」がくり返され、また刺史として出鎮しゆちんが強いられた。その最後は舒州刺史在任時に異母兄上金とともに誣告を受けて洛陽に召喚され、都城南郊の龍門駅で縊り殺されたことは前述のごとくである。享年四十三。則天武后は庶人の礼をもつて素節を葬り、その十三子のうち九子を誅殺したが、末の四子は年少を理由に雷州に禁錮とした。中宗が重祚すると素節は許王を追封され、王礼をもつて乾陵に陪葬された。

第一女義陽公主と第二女宣城（高安）公主、生母は蕭淑妃。二公主は母が廃されたのち則天武后によつて皇妃が住まう掖庭えいていに幽閉された。後述するように皇太子李弘がその救済を奏請すると、二人を憎む則天武后は義陽公主を家格の低い権毅に、同じく宣城（高安）公主を王勗きやく（遂古）に降嫁させた。また二人は上金・素節とともに高宗の大葬に「赴哀」することを許されたが、そのうち義陽公主の消息は明らかでなく、妹の高安公主が神龍年間に天子の姉たる長公主に進冊されたことから、この時点では薨去していたのであろう。なお乾陵の陪葬墓に名が見えることから、復辟した中宗によつて高宗の第一公主として重んぜられたことは誤りなからう。高安公主は武周の天授年間（六九〇）六九二）に王勗が誅殺されたものの、長公主として実封千戸、開府置官が許される厚遇を受け、開元年間（七一三）七四一）の薨去すると玄宗が暉政門に哭し、莊重な葬儀が営まれた。

第三女太平公主、生母は則天武后。高宗の末女で武周・中宗・睿宗の三朝の政治史に大きな足跡を残した。『旧唐書』太平公主伝によると、太平公主は則天武后に容貌と性格が似ていることから愛幸され、その臨朝称制期から武周朝に至る二十余年にわたつて天下の公主のなかで貴盛無比とされた。太平公主は、永隆二年（六八一）七月に薛紹せつせうに降嫁して二男二女を生んだが、垂拱四年（六八八）十一月、称制下の李氏庄迫に危機感をいだく諸王の反乱に薛紹が関与して誅殺されると、則天武后は武氏一党の有力者である武攸暨ぶきけいの妻を殺害して太平公主を配したため、その間に二男

一女を生んだ。そのうち太平公主は神龍元年（七〇五）、武後の老衰によつて専横を振るう張易之・昌宗兄弟の誅殺に重要な役割をはたして中宗の復辟を導き、さらに唐隆元年（七一〇）の韋后一派による中宗ちんぎやう酖殺に際しては臨淄王李隆基（玄宗）に協力して睿宗の即位を実現、睿宗朝に確固たる地位を築いた。こうして太平公主は武周時代は母の庇護のもとで、また中宗朝・睿宗朝では軸足を父系にもどして皇妹として重きをなし、権力を掌握したが、先天元年（七一二）の玄宗即位によつて睿宗が太上皇に退くと、玄宗との権力闘争がはじまり、翌二年（七一三）七月、玄宗によつて一族もろとも誅殺されたのである。享年は四十九ほどと考えられる。中宗朝および睿宗朝における太平公主の政治的動向については別稿に譲りたい。

五 李弘の皇太子冊立と廃位

（一）李弘の気質と学問

『旧唐書』李弘伝は李弘を高宗の第五子とするが、則天武後の所生としては第一子となる。その出生の詳細は記されぬが、上元二年（六七五）四月に二十四歳で薨じたことから永徽三年（六五二）の生まれとなり、同年七月の李忠立太子と重なることとなる。

永徽七年（六五六）正月、五歳の李弘は異母兄李忠の廃位にともなつて皇太子に冊立された。その短い生涯で特筆すべきは生真面目な性格と儒教的な正義の実現に邁進したことであるが、その性格や言動が形成された背景には、李賢のばあいと同じく「夙敏」しゆびん「たらしむる教育があることは想像にかたくない。そして李弘の言行はやがて生母則天武后との対立を惹起し、その手にかかつて酖殺される悲劇的な最後につながるのである。

それでは李弘伝にもとづいて、その人物像を考察することにしよう。まずは十歳に満たぬ李弘が師の郭瑜かくよについて『春秋左氏伝』を受講した折のことである。その講義が楚の太子商臣（穆王）による父成王（楚子頽）の弑殺におよぶと李弘は卷子を閉じて嘆声をあげ、「此の事、臣子として聞くに忍びざる所なり。経籍は聖人の垂訓なり。何故に此を書するや」と質した。それは『春秋左氏伝』文公元年の「冬、十月丁未、楚の世子商臣、其の君頽を弑す」とする経文への疑義であるが、それに対して郭瑜が「孔子、春秋を修むるの義は褒貶ほうへんに存あり。故に善悪は必ず書す。善を褒めて以て代に示し、悪を貶めて以て後に誡いまいむ。故に商臣の悪をして、千載に顕あらわしむるなり」と説くと、李弘は「唯だ口に道うべからざるに非ず。故に亦た耳に聞くに忍びず。請う改めて余書を読まん」として、このような汚濁の故事は口耳に憚るとして『春秋左氏伝』の講読を拒否し、改めて郭瑜が推す『礼記』を選択するのである。この挿話は生涯を通じて儒教的な正義を奉じた李弘を象徴するが、十歳に満たぬ少年の言動であることを想起すれば、そこに則天武后と傳育者による教育の影響を認めざるを得ないであろう。否むしろ則天武后の厳しい管理下に置かれた幼少期に徹底された帝王教育によつて李弘生来のすぐれた資質が感化され、生真面目で潔癖に過ぎる性格が形成されたのではなからうか。ここで付言すると、則天武后の過重なる期待のもとで過ごす緊張感と傳育者から身体に刷り込むがごとく施された教育は、李弘の性格を少なからず歪め、偏向させて自己の正義に固執する性癖を形成、助長したと考えられる。後述するごとく、それは父高宗や母則天武后を忌憚なく批判し、頑なに自己の主張を貫こうとする姿勢にながったと考えられる。以下、節を改め、それを解説しよう。

(ii) 李弘の正義と皇太子廃位

龍朔元年（六六一）、十歳の李弘は許敬宗、許國師、上官儀、楊思檢らに『瑤山玉彩』の編纂を下命した。この

五百卷の大冊は歴代の英詞麗句をまとめたもので、同三年二月に完成して十二歳となった李弘から高宗に奉呈され、賜物三万段が褒賞された。それは皇太子李弘の名を高めたであろうが、李弘自身がその意義を説き、編纂を発議したとは考えがたく、総裁職は名譽的なものであろう。これに対して左に引く李弘伝の各条には確固たる意志が示されているのである。

(一) 総章元年二月、親しく司成館に積菜^{せきさい}す。因りて顔回^{げんかい}に太子少師、曾參^{そうじん}に太子少保を贈るを請い、高宗並びに之に従う。

これは、総章元年(六六八)二月、十七歳の李弘が司成館(国子監)において先聖先師を祭る積菜の儀式をみずから司るとともに、顔回^{げんかい}に太子少師を、曾參^{そうじん}に太子少保を追贈することを請い、高宗は聞き入れたとする。これは短文ながら儒教の世界に生きる李弘を描写するものであろう。

つづく(二)と(三)は高宗の政策を批判し、その修正を迫るものである。

(二) ①時に勅有り、辺遼に征する軍人の逃亡して限内に首^{しらが}わざる及び更に逃亡する者有れば、身は並びに斬に処し、家口は没官せよ、と。②太子上表して諫^{いさ}めて曰く、竊^{ひそ}かに聞くならず、所司は軍より背^にぐる人の身久しく出でざるを以て、家口は皆な没官に擬^ぎす。亦た限外に出首するもの、未だ断罪を経ざれば、諸州の囚禁の、人数は至多なり。③或いは臨時に病^あに遇い、軍伍に及ばず。茲^{これ}に縁^{ちか}みて怖懼し、遂^{つい}に即ち逃亡す。或いは樵採に因りて、賊に抄掠せらる。或いは渡海して来去し、滄波に漂没^{ひょうぼつ}す。或いは賊庭に深入して、傷殺せらる有り。④軍法嚴重にして、皆な須く相い儻^たるべし。若し給儻^{けん}せず、戦亡に因らざるに及べば、即ち同隊の人、有罪に兼合す。遂に故無くして死失する有れば、多く注して逃亡と為す。⑤軍旅の中、勘当する暇^{いと}あらざれば、直だ隊司の通状に抛りて、將に真逃^{まに}と作し、家口は総て没官せしむ。⑥論情実に哀愍^{あいびん}すべし。書に曰く、其の不辜^{ふこ}を殺さんよりは、寧ろ不經^{ふけい}に失せよ、と。伏して逃亡の家の、其の配没

を免せんことを願う。⑦制して之に従う。

これは、①唐の第3次高句麗遠征（六六七～六六八）に関する高宗の詔勅で、遼水方面に出征した唐軍の逃亡者で期限内に自首せざる者および逃亡をつづける者はならびに斬刑に処し、その家族は没官せよと命ずるものである。

これに対して十六～十七歳ほどの皇太子李弘は上表して諫言し、②「竊かに聞くなり」として、所司は軍の逃亡者で久しく出頭せぬ者の家属は皆な没官に擬定する。また期限外の出頭者は裁判もなく罪を断じするため、諸州の囚禁数は至多となっている。ただし逃亡者とされるなかには、③急病で所属部隊に出頭できず、それが罪に連なることを怖懼して逃亡した者、山野で樵採するおり賊徒に抄掠された者、渡海して来去する折に滄波に漂没した者、深く敵領に侵入して傷殺された者などさまざまである。しかしながら④軍法は嚴重で、兵士は皆なすべて儻りていなければならず、若し兵士が給りないばあい、戦死でなければ、同隊の者はなべて有罪となる。このように理由が不明の死亡や失踪は、ほとんど逃亡と注記されてしまう。⑤ただし軍旅中はその当否を審議する暇がなく、隊司の通状のみで逃亡者を見なし、家属はのこらず没官されているのである。以上が李弘の把握する遼東方面軍の実情であるが、ここではまず、このような情報を収集し、分析する李弘の偉才と配下の有能に刮目すべきであろう。

そして李弘は、⑥その情況はまことに哀愍すべきとして、『書経』大禹謨の「不辜を殺さんよりは、寧ろ不經に失せよ」を提示し、罪なき民を処刑するよりは、常法に沿わずとも免ぜよとして逃亡者の家も配没せざるよう願ひ出るのである。これはまさに高宗朝の過誤を指摘し、是正を求めるものであるが、⑦高宗は応諾して制詔を下し、従つたとする。ここで一考すると、李弘に信頼を寄せる高宗はもとより、大上段に『書経』を掲げる皇太子に論駁する官人はおらぬであろうが、君側からは驕傲を指彈する囁きが洩れたのではあるまいか。そして李弘は、当然それを想定したと思われるが、自己の主張すべき大義に比すれば瑣事に過ぎぬと断じたのであろう。ただし、このような李弘の言動に批判が集まることは想像にかたくなく、李弘自身も年齢とともに自己の正義と現実との落差を知り、苦悩を深め

たと推測される。

つぎは李弘二十歳のころの出来事として、

(3) ①咸亨二年、駕東都に幸し、太子を京師に留め監国たらしむ。時に属きて大旱し、関中飢乏す。廊下の兵士の糧を取らしめて之を視、食に楡の皮と蓬の実有る者を見、乃ち家令等をして各おの給米して足らしむ。②是の時戴至徳、張文瓘ら左庶子を兼ね、右庶子蕭德昭と与に同じく輔弼を為す。太子疾病多く、庶政は皆な至徳らが決す。③時に義陽、宣城二公主母の得罪を以て、掖庭に幽さる。太子之を見て驚き惻み、遽かに奏して出降せしむるを請う。④又た同州沙苑の地を以て貧人に分借するを請う。詔して並びに之を許す。さて、①は、咸亨二年(六七一)高宗の洛陽行幸にともない、国政を代行する監国を命ぜられて長安に留まる李弘が早魃による関中の飢乏のなか、宮中の回廊につめる兵士の糧食を取り寄せ、そこに楡の皮や蓬の実が混ざるのを視て、家令に給米させたとするものである。また④は、朝廷の養馬の地である同州沙苑監が治める土地を貧人に分貸することを請い、勅許を得たとする。

これは前掲(2)の上表文とともに李弘が下級官吏や細民に配慮することを示す。ただし②李弘は病気がちで、庶政はあげて戴至徳、張文瓘、蕭德昭らが決したとする。李弘が民情に通じたのは事実であろうが、それは補弼者の助言によるのであろう。ここで注目すべきは李弘の名で上表された内容で、それは(2)と同じく高宗朝への批判に通ずる危うさをはらむが、李弘はすべてを承知して己が正義を貫いたのであろう。そして、そのような視線が則天武后に向けられることは時間の問題で、武后もまた李弘の動向に警戒を高めたことは想像にかたくない。

このような情況のもと李弘の健康は少しずつ蝕まれていくのである。それは『資治通鑑』咸亨三年の条に、太子、宮臣に接すること罕なり。典膳丞たる全椒の邢文偉は輒ち供膳する所を減らし、并せて上書して太子を諫む。太子復書して、謝するに多疾及び入侍の少暇を以てし、其の意を嘉納す。

とする一文は右の「太子は疾病多し」とあわせて、心身ともに病み疲れた李弘は食欲をなくし、宮臣と面談することもままならなくなつて引き籠もり、孤立する情況を示している。

そして、李弘と則天武后が対立する契機となるのが③に見える義陽、宣城二公主の掖庭幽閉事件である。

ここでは『資治通鑑』上元二年の条を併せて解説したい。

(4) 義陽、宣城二公主は、蕭淑妃の女なり。母の得罪に坐して、掖庭に幽され、年三十を踰ゆるも嫁がず。太子之を見て驚き惻み、遽に出降を奏請し、上之を許す。天后怒り、即日公主を以て上翊衛權毅、王遂古に配当す。

これは永徽六年(六五五)に廃された蕭淑妃の所生になる義陽公主と宣城公主が母の罪に坐して二十年あまり掖庭に幽閉され、三十歳を超えて不嫁であることに驚き惻んだ李弘が高宗に出降を奏請し、勅許を得たとする。この二公主は李弘の異母姉で、それを知つた則天武后は激怒し、その日のうちに家格の低い禁軍將校の權毅に義陽公主を、同じく王勗(遂古)に宣城公主を降嫁させた。それが李弘と高宗に対する意趣返しであることは説明を待たぬが、この件によつて李弘は則天武后が王皇后と蕭淑妃に強いた旧悪の全貌を知つたのである。

ただし、それは「李弘醜殺」の主因にならぬことを指摘しておく。すなわち『資治通鑑』はこの一件を上元二年(六七五)四月に置き、前掲(4)の記事につづけて「己亥、太子合璧宮に薨す。時人以爲えらく、天后之を醜す」と記してその因果關係を示唆するが、李弘伝は(3)の記事につづけて「召されて東都に詣り、右衛將軍裴居道の女を納れて妃と爲す」と記すのである。それについて高宗本紀は「咸亨」四年二月壬午、左金吾將軍裴居道の女を以て皇太子弘の妃と爲す。(十月)乙未、皇太子弘の納妃畢る」として咸亨四年(六七三)に洛陽で李賢の婚儀が挙行されたことが確認できる。時に李弘は二十二歳であるから、醜殺までなお二年近い歳月があるのである。

ここで一言すると、則天武后は母の眼差しをもつて李弘の納妃をすすめ、自己の正義に固執する頑なな性格を和ら

げ、己に向ける批判を減じようとしたのではなからうか。李弘夫妻の睦まじい様子は本伝に「裴氏甚だ婦礼有り。高宗嘗て侍臣に謂いて曰く、東宮の内政に吾憂うること無し、と」とあるごとくである。

ただし、そのような母の深慮も李弘の言動を改めることはなかったようで、納妃の完了から一年半のち李弘は高宗に扈從して洛陽城西郊の合璧宮に赴き、卒然と薨去するのである。それについて本伝は「上元二年、太子は合璧宮に幸するに従い、尋いで薨す。年二十四」として自然死のように記すが、『新唐書』高宗本紀は「天后、皇太子を殺す」とし、『資治通鑑』は「天后、之を酖す」と明記する。間違いなく李弘は則天武后に酖殺されたのであろう。

さて、問題はその理由である。この対立について『資治通鑑』は、

太子弘は仁孝、謙謹にして、上甚だ之を愛す。礼もて士大夫に接すれば、中外心に属む。天后方に其の志を逞しうす。太子奏請して数しば旨に迂らう。是に由りて愛を天后に失う。

と記す。ここで注目すべきは、李弘は増大する則天武后の野心を抑えるべく、くり返し高宗に奏請したため、母の愛を喪失したとする指摘である。武后の志とは垂簾聽政の継続にほかならぬが、李弘の正義からすると、それは即座に改めねばならぬもので、そこに生じる軋轢など瑣事に過ぎぬのである。

左は、その具体的な状況を伝える『旧唐書』高宗本紀の一文である。

①（上元二年三月）時に帝風疹ありて聽朝する能わず、政事は皆な天后に決す。②上官儀を誅してより後、上視朝する毎に、天后御座の後に垂簾し、政事は大小皆な之を預り聞く。内外称して二聖と為す。③帝詔令を天后に下して国政を撰らしめんと欲するも、中書侍郎郝処俊諫めて之を止む。

これは、①上元二年（六七五）三月、高宗は風疹による目眩のため聽朝できぬため、政事はすべて則天武后が裁可した。この垂簾聽政の儀は②則天武后の廢位をねらう上官儀を誅殺した麟徳元年（六六四）にはじまるもので、高宗が朝するたびに御座のうしろに簾を垂れて天后が座し、政事は大小となく預聞するので、宮中内外は高宗と武后を二聖

と称した。やがて③高宗は詔して天后に国政を撰らせようとしたが、郝処俊が諫止したする。

則天武后の垂簾聽政はすでに十二年の長きにわたる。ここで李弘の心中を推し測ると、高宗の病が篤く、皇太子たる自分が幼少であるかぎりはそれも許されようが、氣力、学識、体力ともに充実した二十四歳の現在では、とうてい認められぬとしたに相違ない。父の即位年齢を二歳超えることも意識したであろう。ここでは迅速な即位こそが正義なのである。高宗本紀はこの一文の直後に、

〔四月〕己亥、皇太子弘、合璧宮の綺雲殿に薨す。時に帝は合璧宮に幸するも、是の日、東都に還る。と記して、この二つの事例の因果関係を示唆するごとく編纂されている。

ここで推察すると、三月の詔令降下から酖殺までの一月余の間に、李弘は天下公道のために母子の縁を絶ち切つて則天武后を糾弾し、高宗にすみやかな讓位を迫つたのではなからうか。史料はおしなべて沈黙するが、李弘がくり返し正義を上奏したであろうことは想像にかたくない。その結果、少なくとも高宗が讓位に傾いたことは酖殺直後に出された詔に「朕、方に皇太子に位を禪らんと欲するも、疾遽にして不起たり」（『資治通鑑』上元二年五月の条）とあることから首肯できよう。そして、この情況に危機感をつのらせた則天武后は李弘を敵とし、その殺害を急いだのであるまいか。その断固たる決意に李弘の正義はあえなく滅び去つたのである。

皇太子李弘の酖殺は、「是の日」のうちに洛陽に逃げ帰つた高宗をはじめとして宮中内外の人士を震撼させたに相違ない。『新唐書』高宗本紀は事件後の動向について、

五月戊申、皇太子に追号して孝敬皇帝と為す。六月戊寅、雍王賢を立てて皇太子と為し、大赦す。八月庚寅、孝敬皇帝を恭陵に葬る。

と記す。すなわち李弘の酖殺から九日後に孝敬皇帝の追贈が、三十九日後に次弟雍王李賢の皇太子冊立がなされるのである。前述のごとく、皇太子李忠の廢太子と李弘の立太子は永徽七年（六五六）正月辛未の同日中に実施され、ま

た皇太子李賢は調露二年（六八〇）八月甲子に廃位され、翌乙丑に次弟英王哲（顯）の立太子がなされている。この二例に比べると、皇太子李弘のばあいは後継者の擁立に四十日近い時間が費やされていることに注意しなければならぬ。それは李弘の酖殺があまりにも突発的かつ衝撃的な事件であるため、混乱の收拾には多くの時間と労力を要したことを物語るものである。

最後に、李弘が孝敬皇帝として埋葬された恭陵は唐の皇帝陵としてはじめて長安を離れ、洛陽の東郊に造営された礼制建築物であることから、都城とされた長安に対して陪都に過ぎない洛陽の地位を高め、のちに武周朝の都城となる神都洛陽につながることを一言しておく。

六 皇太子時代の李賢と『後漢書注』の奉呈（二十二歳〜二十三歳）

李賢の皇太子冊立と『後漢書注』の奉呈

李賢が皇太子に冊立されたのは則天武后によつて兄の皇太子李弘が酖殺されてから四十日ほど経過したのち、その衝撃と混乱がようやく沈静に向かうころであつた。それについて李賢伝は、

上元二年（六七五）、孝敬皇帝薨す。其の年六月、立ちて皇太子と為る。天下に大赦す。

と記すが、李賢は調露二年（六八〇）八月に廃されるので、その在位は五年二か月となる。その前半期で注目すべきは、監国として高い事務処理能力と『後漢書注』を奉呈したことである。李賢伝はそれを、

- ① 尋いで監国たらしむ。賢の処事は明審にして、時論の称える所と為る。
- ② 儀鳳元年、手勅もて之を褒えて曰く、
- ③ 皇太子賢は、頃監国たりてより、政要に留心し、撫字の道は、哀矜を既尽し、刑網の所施は、務め審察に存り。

④加うるに余暇に聴覽し、墳典に專精す。往聖の遺編は咸な壺奥に窺い、先王の策府は備に精に討ぬ。⑤善を好み彰を載し、貞きを作すこと斯れ在り。家国の寄たること、深く懷う所に副う。賜物五百段なり、と。

と記す。これによると李賢は、①立太子後まもなく監国を命ぜられて国政を統べたが、その処事は明審で、時論の稱賛を得たことから、②儀鳳元年（六七六）、高宗は手勅をもつて褒め称え、③皇太子賢は監国として、心を政要に留め、撫で慈しむ施政は、相手を思いやり、哀れみを尽くして、刑律を適用する、その務めは審しく調べ、察かにすることと心得ている。また④余暇には經典の聴覽に專精し、往聖の遺編や先王の策府に窺い、その精華に討ねる真摯な姿勢を褒め、最後に⑤道理を好むことを彰らかにし、正義を作すことはここにある。わが家の寄る辺、国の柱石たること、深く我が意にかなうとして、賜物五百段を下すとす。

これは前皇太子の酖殺によつて動揺する宮中内外を静めるため、李賢の真面目な性格と學問を好む姿勢、さらには高い行政能力と慈愛に満ちたその施政を滿天下に示して、新皇太子が大唐帝國を担うにたることを宣言するものであらう。

李賢伝はつづけて李賢の『後漢書注』について言及し、

賢又た當時の學者太子左庶子張大安、洗馬劉訥言、洛州司戶格希元、學士許叔牙、成玄一、史藏諸、周寶寧等を招集し、范曄の後漢書に注し、表して之を上る。賜物三萬段、仍ち其書を以て秘閣に付す。

と記す。これは『後漢書注』の編纂に関する記事で、これによつて李賢は張大安、劉訥言、格希元、許叔牙、成玄一、史藏諸、周寶寧らを召して范曄『後漢書』に注釈を施して奉呈し、高宗から賞賛とともに賜物三萬段が下され、その書は宮中秘閣に蔵されたことが確認できる。その年次は高宗本紀は「十二月丙申、皇太子賢、注する所の後漢書を上る。賜物三萬段」とすることから李賢二十三歳の歳晩にあたることが知られる。

おわりに

本稿は、拙著『後漢書劉昭注李賢注の研究』（汲古書院、二〇一三）の諸篇にもとづいて章懷太子李賢墓の兄弟姉妹および妃嬪三子について解説するものである。皇太子時代の李賢については『後漢書注』を奉呈する二十三歳までとしたが、それ以降の動向は前稿「章懷太子李賢と李賢墓壁画」（『早稲田大学高等学院研究年誌』第六四号、二〇二〇年）に記したので併読いただければと思う。なお紙幅の都合によって『後漢書注』の総合的な解説については別稿に譲ることとする。

